

# 交流拠点が離島地域にもたらす影響

安倍 ひより<sup>1</sup>・片岡 由香<sup>2</sup>・

<sup>1</sup> 非会員 愛媛大学 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)  
E-mail: dg003002k@ehime-u.ac.jp

<sup>2</sup> 正会員 愛媛大学講師 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)  
E-mail: kataoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp

離島地域はこれまでに「離島振興法」により多様な政策が行われ、島民の生活の質の向上が図られてきたが、人口減少や高齢化は著しく進行し続けている。それらの課題を解決するため、近年は島内外を繋ぎ、人々の交流を促すような取り組みが盛んとなっている。本研究では、そのような取り組みの 1 つとして挙げられる交流拠点到に着目した。愛媛県八幡浜市大島に整備された交流拠点「大島テラス」を事例として、島民を対象にヒアリング調査を実施し、地域愛着、移住者や島外の人を訪れることに対する考え、今後の島の将来についての考えの 3 つの項目について回答を得た。本ヒアリング調査の結果をもとにアンケート調査を実施する。それらの分析から、今後の離島地域における住民の交流拠点に対する関わりを促すために必要となる知見を得ることを目的とする。

**Key Words:** remote island, depopulated area, a place to communicate

## 1. はじめに

### (1) 背景と目的

離島地域は、歴史文化が受け継がれていることや、現代希薄になりつつある地域間の繋がりが色濃く残っていることなど、多様な価値を持っている。四方が海に囲まれた地理的特性から課題も多く、これまでに 1953 年に制定された「離島振興法」によって様々な政策が行われてきた。港湾、道路などの基盤の整備や医療、福祉、教育の改善などを中心に島民の生活の質の向上が図られてはいるものの、人口減少・高齢化といった問題は本土地域と比べて顕著に進行し続けている<sup>1)</sup>。

これらの課題解決に向けて、近年では、島内外を繋ぎ、人々の交流を促すような取り組みが積極的に行われるようになってきている。例えば、島外の生徒を受け入れる離島留学制度<sup>2)</sup>や、体験型修学旅行の受け入れ<sup>3)</sup>、瀬戸内国際芸術祭などをはじめとした観光交流政策などが挙げられる。このように、近年離島では多様な交流事業が行われており、そのような取り組みの 1 つとして、交流拠点を整備することが注目されている。

過疎地域と都市の交流事業の有効性としては、「交流の鏡効果」がしばしば指摘されている<sup>4)</sup>。これは、島外の人々との交流活動を通して外からの視点で地域を見つ

め直すことにより、島民の地域の魅力の再認識に繋がるということである。島外からの来訪者に対しても、来訪地域の住民との交流が、観光客の当該地域の愛着に影響を与えることが明らかになっている<sup>5)</sup>ことから、このような交流事業は有効であると言える。また、社会の変化により、地域間の繋がりが希薄化している現代において、人々が気軽に訪れ、自由に交流できるような場を作ることが求められている。さらに、誰にでも開かれた、自由に滞在できる場が整備されているということは、島外からの来訪者が島を訪れるハードルを下げることでできるといった利点も挙げられる。交流拠点を整備することにより、人口減少や高齢化といった課題が即座に解決するとは言えないが、地域住民の地域に対する誇りの醸成や、来訪者の当該地域に対する愛着を高めるといった、人々の意識の変化を促す取り組みを積み重ねることは、移住者が増加する可能性が高まるなど、長期的に見ると、それらの離島が抱える課題解決に向けて効果をもたらすといえるだろう。

以上の理由から、交流拠点は現代において大きな役割を果たしており、人口減少が進行すると予想される地域においても、交流の場の形成が重要となる。交流拠点が地域においてより効果を発揮するためには、当該地域の住民の積極的な関わりが不可欠である。しかし、住民

の主體的な関与を得ることは容易ではなく、それらを促進していくために効果的な方法や、必要となる要素を把握することが求められている。

このような背景のもと、本研究では、愛媛県八幡浜市大島に整備された交流拠点「大島テラス」を事例として、離島地域における交流拠点がもたらす影響について考察したい。具体的には、島民を対象に、地域愛着、地域の存続意識といった地域に対する意識及び時間的展望と、交流拠点への関与度の関係について明らかにすることを目的とする。地域住民が地域に対するどのような意識や時間的展望を持つことが、交流拠点への積極的な関わりに繋がるのかを把握することは、他地域で、交流拠点の整備をはじめとした交流事業を行う際にも有益な知見となり得る。先述したように交流拠点の効果的を發揮するためには、地域住民の協力が重要であり、積極的な関わりを持つために必要な要因を明らかにすることで、住民の積極的な関与を促すためのアプローチについて示唆を得たい。

## (2) 関連する既往研究

本研究に関連する既往研究としては、漁村における交流事業が漁村にもたらす効果や課題に着目した研究<sup>6)</sup>や、坊勢島が人口増を続ける要因を居住システムや慣習に着目して明らかにした研究<sup>7,8)</sup>などが見られる。しかし、離島地域において、地域に対する意識や時間的展望と、交流拠点への関与度について明らかにした研究はこれまでに見られないため、本研究には新規性があると言える。

## 2. 調査方法

### (1) 調査対象地

#### a) 大島の概要

研究対象として取り上げた八幡浜大島は、愛媛県八幡浜市に属し、八幡浜市内より南西約 12km の沖合に位置する。面積 1.82 km<sup>2</sup>、人口は 169 人(2022 年現在、施設等に入居し、現在島に住んでいない人を除く)の小規模な離島であり、八幡浜市唯一の有人島である。粟ノ小島(あわのこじま)、大島(おおしま)、三王島(さんのうじま)、地大島(じのおおしま)、貝付小島(かいつきこじま)の 5 つの島を総称して大島と呼ばれており、大島までは、八幡浜港から 1 日 3 便運行している定期船を利用し、乗船時間約 22 分で渡ることができる。大島、山王島、地大島の 3 つの島は橋で結ばれており、集落が存在し人が居住しているのは大島のみである。

2022 年現在、高齢化率は 74%、後期高齢化率 51.5% を記録し、最年少の住民が 37 歳と、他地域と比較して

も、人口減少・少子高齢化が顕著に進行する離島である。大島は当初は無人島だったが、350 年ほど前に対岸の八幡浜市穴井地区の庄屋が渡ったのが始めとされている。イワシ漁を中心として栄え、畑地を開墾することで人口も増加し、多い年では 1,200 人が生活していた。昭和 40 年代は海水浴場として賑わい、多い年では約 2 万人の来島者が訪れたという記録も残っている。

産業としては水産業が主である。島で獲れる活ハモや太刀魚、ひじき等は市場でも高値で取引されている他、ウニやサザエ、アワビ等の潜り漁も盛んである。近年は新たな養殖業として、高齢者でも取り組める陸上養殖(アワビ種苗・スジアオノリ)に廃校となった旧小中学校(現・大島産業振興センター)で取り組んでいる。

主な行事としては、8 月の盆踊り、10 月の秋祭り、11 月の文化祭などが挙げられる。8 月に開催される盆踊りは 2 日間にかけて行われ、初日はご先祖様に明るく元気な島に帰ってきて欲しいという思いから、カラオケ大会等のイベントが行われる。2 日目の盆踊りでは、300 年間ほど続くと言われている「高松踊り」が行われており、長編の叙事詩を同じ旋律にのせて歌う、口説きに合せて踊りが行われる。10 月の秋祭りも 2 日間にわたって行われる。初日は夜神楽があり、県指定無形民俗文化財の「川名津神楽(八幡浜市川上)」による舞いの奉納が行われ、2 日目には、神輿を途中で漁船に寄せ、海岸線に沿って練り歩くといった、珍しい神輿巡礼が行われている。11 月の文化祭は、廃校となった旧小中学校にて開催されており、もちまきや抽選会、手芸や書道、俳句などサークルの活動や個人の趣味で制作した作品の展示も行われる。毎年 100 名ほどが参加する島の一大イベントである。

#### b) 大島交流館「大島テラス」

2018 年 8 月に大島交流館「大島テラス」が完成した。この施設は、船の待合所・島の情報発信・カフェなど様々な機能を兼ね備えており、島民や観光客の人々が気軽に集い交流できるような場を作りたいという思いから整備された。当時の大島の地域おこし協力隊の方(現在の大島テラスの管理人)の働きかけが契機となり、八幡浜市の事業として施設の整備が実現した。2017 年 8 月に設計コンペが実施され、379 件の応募の中から最優秀に選ばれた作品をモチーフとして建物が建設された。(写真-1)ガラス張りで建物の中から海が眺められるような設計になっており、室内は船の待合所として利用したり、飲食を行うことができるようなスペースとなっている。(写真-2)

カフェでは、島で獲れたサザエやアジなどの魚介を使用したランチや、珈琲やジュースといった飲み物などを、テラスで働く島のお母さんたちが提供している。また、飲食や休憩ができるスペースに加え、島の特産品で

あるスジ青のり使った商品や、島の方が育てた野菜、島の方の手作りの雑貨の販売なども行われるなど、様々な機能を兼ね備えた交流拠点となっている。



写真-1 大島テラスの外観



写真-2 大島テラスの内観



写真-3 島民が利用する様子

全体的な建物の管理は八幡浜市が行っているが、テラス内に併設しているカフェは、島民3名で立ち上げた会社「合同会社大島未来商店」により管理運営を行っており、島在住の女性達7名が働いている。

これまで島内には来訪者が自由に滞在できる施設がなく、近年は島外から来る人々はほとんど見られなかったが、この施設の整備をきっかけとして、島外からの来訪者も訪れるようになった。来訪者は八幡浜市を中心とした愛媛県内の方が多量のもの、関東圏など遠方から来られる方もいるなど、全国各地から大島へと訪れる人が見られるようになってきている。また、島外からの来訪者に限らず、島民の利用も見られている。(写真-3)

## (2) 調査方法

本研究は、事前調査と本調査の2段階で調査を実施する。事前調査は、2022年7月26日～2022年8月6日の12日間実施した。本調査で行うアンケート調査の項目の検討における知見を得ることを目的として、実際に現地に滞在し、大島テラス内に併設されているカフェのスタッフをしながら、参与観察を行い、カフェで働く島民や大島テラスへの来訪者に対してヒアリング調査を行った。事前調査で得られた結果をもとに、本調査としてアンケート調査を実施する。

### a) 参与観察およびヒアリング調査

大島テラス内カフェで働く島民6人、大島テラスを利用していた島民9人にヒアリング調査を行った。1) 地域愛着について、2) 移住者や島外の人が訪れることに対する考え、3) 今後の島の将来についての考えの3つの項目について質問を行い、相手やその場の状況に合わせて、その他の項目についても追加で質問を行った。

#### 1) 地域愛着について

大島テラスを良く利用する島民は、「島の人は皆いい人である」「都会より島で暮らすほうが好き」といった意見が見られ、島に対してプラスのイメージを持っている人が多いように見られた。また、カフェで働く島民に関しては、「島の人間関係は複雑だ」「将来は若い頃暮らしていた地域に戻りたい」などの意見もいくつか挙がったことから、必ずしも地域に対する愛着が高いとは言えないことが推察された。これは、カフェで働く島民の中には、勤務に対してあまり積極的ではなく、受動的である人がいることなど、大島テラスに関わることにに対する意識の違いが影響を及ぼしていることが考えられる。加えて、テラスで働く島民は全員女性であり、利用している島民はほとんど男性であるということから、性別間による違いも考えられる。

#### 2) 移住者や島外の人が訪れることに対する考え

交流拠点に関与している人には、移住者など、島の外の人に来てくれることは嬉しいという意見を持つ傾向が見られた。移住者に関しては、移住したとしても職がないため難しいのではないかという意見も見られたが、移住することに対して反対であるという意見を述べた人は見られなかった。また、観光客の受け入れに対しては、大島テラスの運営に携わっている人やカフェで働く人が特に、観光客が更に来てほしいという意見が見られた。「大島テラスに携わっていなかったら、観光客が来てほしいとは思わなかったと思う」といった意見が見られたことから、大島テラスに携わることを通して、このような意識が育まれたと考えられる。

#### 3) 今後の島の将来についての考え

これまでに島外での居住経験があったり、島の外での経験や知識を積み重ねている人ほど、現在の島を変えよ

うと行動を起こしたり、未来志向である傾向が見られた。離島といった隔絶された地域の中では知り得ないような、複雑で多面的な社会を知り、人生の中で様々な物事を経験することで、客観的な知見と広い視野を獲得し、将来の島についても主体的に考えることに繋がるのではないかと推察される。

このような結果から、地域の将来に対してどのような思いを抱いているのか、島内外での交流活動などが、交流拠点への関与度に影響していると推察された。

#### b) アンケート調査の概要

アンケート調査は、前述のヒアリング調査の結果を踏まえ、地域愛着、地域の存続意識など地域に対する意識や時間的展望と、大島テラスへの関与度の関係性を把握することを目的として実施する。全島民を対象とし、調査票は全戸を個別訪問し、配布する。

### 3. おわりに

本稿では、愛媛県八幡浜市大島の離島地域を対象として、住民の地域への意識と、交流拠点への関与度の関係について、参与観察およびヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査の結果より、交流拠点の運営に関わる住民や、利用者として拠点と接点を持つ住民に関しては、島外からの移住者の受入れについて前向きな意見が見られた。また、進学や就職、出身地などが島外であり、これまでに島外での居住歴がある人や、交流関係が広く、島の外のことをよく知っている人など、島外との繋がりが強い人ほど未来志向であることが窺えた。

### 参考文献

- 1) 国土交通省：島づくりのトリセツ～島の将来を考える～、<https://www.mlit.go.jp/common/001229951.pdf>, (参照 2022-9-29), 2018.
- 2) 垣野 義典, 伊藤 俊介, 倉斗 綾子：地域資源を活用した離島留学制度に関する研究 -薩摩川内市立鹿島小学校のウミネコ留学制度を対象として-, 日本建築学会技術報告集, Vol.26, pp.1114-1119, 2020.
- 3) 助重 雄久：「若い力」を活かした島の活性化-民泊・域学連携事業・国内移住の可能性と課題-, 日本地理学会発表要旨集, 2015 年度日本地理学会春季学術大会.
- 4) 小田切 徳美：地域づくりと地域サポート人材-農山村における内発的發展論の具体化-, 農村計画学会誌, Vol.32-3, pp.384-387, 2013.
- 5) 谷口 綾子, 今井 唯, 原文 宏, 石田 東生：観光地における多様な主体の地域愛着の規定因に関する研究-ニセコ・倶知安地域を事例として-, 土木学会論文集D3 (土木計画学) Vol.68-5, I\_551-I\_562, 2012, 2012.
- 6) 岸上 光克：漁村再生に向けた都市漁村交流の取り組み実態と課題, 地域漁業研究, Vol.56-3, pp.53-65, 2016.
- 7) 山崎義人, 橋本大, 重村力, 山崎寿一, 杉野香織, 上野浩一：人口増加を続けてきた坊勢島の居住システムの考察, 日本建築学会計画系論文集, NO. 612, pp. 57~62, 2007.
- 8) 山崎義人, 橋本大, 重村力, 山崎寿一, 杉野香織, 上野浩一：坊勢島におけるライフステージに応じた地域内転居システム, 日本建築学会計画系論文集, NO.616, pp.85~90, 2007.
- 9) 山崎義人, 杉野香織, 重村力, 山崎寿一：ライフステージ毎にみた坊勢島における女性の交流の特徴：人口増加を続けてきた坊勢島にみる地域社会の持続に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 計画系, pp. 341~347, 2008.
- 10) 鈴木春菜, 藤井聡：地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol. 25-2, pp.357-362, 2008.
- 11) 白井利明：「時間的展望体験尺度の作成に関する研究」, 心理学研究, Vol. 65, No. 1, pp.54-60, 1994.

## THE IMPACT OF EXCHANGE CENTERS ON REMOTE ISLAND REGIONS

Hiyori ABE, Yuka KATAOKA